

はじまりは 自分の好きな「きれいな音」を探すことだった

【東京・銀座発】この『千人回峰』の連載は、人との「縁」で成り立っているのではないかと思うことがしばしばある。今回ご登場いただいた大萩康司さんのお兄さんはVFXクリエイターの大萩真司さんで、9月12日号と19日号の本欄に掲載させていただいた映像プロデューサーの福山賢一さんとは仕事を通じた親しい仲だという。クラシック好きの私としては、またとないチャンスだ。早速ご紹介いただき、クラシックギターの名手にじっくりとお話をうかがうことができた。

(創刊編集長・奥田喜久男)

母親の趣味が 世界的ギタリストへの道に導く

奥田 最初にギターと出会ったのは、いつのことですか。

大萩 8歳のときです。子どもの頃、私は小児ぜんそくで、外を走り回ったりするとすぐに発作を起こしていました。そのため、家の中で折り紙や粘土といった遊びをすることが多かったのですが、母が趣味のギターを再開したのを見て、自分もやってみたいと思ったのが最初ですね。

奥田 お母さんは、若い頃からギターを弾いておられたのですか。

大萩 地元の同級生が主宰するギターサークルで、初めてクラシックギターにふれたと聞いています。

当時、NHKの教育テレビで「ギターをひこう」という番組をやっていて、その講師として荘村清志さんが出演されていたのですが、母は荘村さんの大ファンでした。私がプロになってから何枚もCDを出しているのですが、母が評価してくれるのはその荘村さんと福田進一さん、鈴木大介さんの4人でつくった「DUO²」というアルバムだけで、他のCDについては何もコメントしてくれないんです。苦労して弾いた作品がほかにもたくさんあるのに(苦笑)。

奥田 やはり、息子がいくら優れたギタリストであっても、ご自身の若い頃のレジェンドの魅力には勝てないのでしょうね(笑)。

大萩 そうですね。それから、もし荘村さんがギターをやっていなかったら、私もギタリストになる



PROFILE 1978年4月、宮崎県生まれ。97年、宮崎県立小林高校卒業後に渡仏。パリ国立音楽院やエコール・ノルマルで学ぶ。ハバナ国際ギター・コンクールで第2位と審査員特別賞「レオ・ブローウェル賞」を受賞し、その後4年間イタリアのキジアーナ音楽院でオスカー・ギリア氏に師事した。ラ・フォル・ジュルネTOKYO、セイジ・オザワ松本フェスティバル、霧島国際音楽祭などの国内主要音楽祭に招かれるほか、最近ではN響（井上道義指揮）と「アランフェス協奏曲」を好演し、またモスクワ、コロンビア、キューバ、台湾での国際フェスティバルに招かれるなど、国際的に活躍している。録音も多く、最近ではメゾ・ソプラノの波多野睦美との「プラテロとわたし」、チェリスト宮田大との「Travelogue」、オーボエ広田智之との「Cantilene」、セルフレーベル第二弾ヴィラ＝ロボス作品集「メロディア・センチメンタル」をリリース。洗足学園音楽大学と大阪音楽大学の客員教授も務める。

構成／小林茂樹
text by Shigeki Kobayashi

撮影／長谷川博一
photo by Hirokazu Hasegawa
2022.9.13／東京都中央区のKAJIMOTOにて

ことはなかったわけですから。

奥田 お母さんにも萩村さんにも感謝ですね。と
ころで8歳の康司少年は、最初にギターを弾いた
とき、どんな感覚でしたか。

大萩 最初は母に「ドレミファソラシド」の弾き方
を覚えてもらったのですが、母の弾く音があまりき
れいではないと感じました。

奥田 ほー、もうすでに……。

大萩 そのとき「もっときれいな音が出ないのか」
と思ったんですね。私も母と同じギターサークルに
入れてもらったのですが、そこの先生が「大萩君が
一番きれいだと思う音で演奏しなさい」と言われて、
きれいな音というのはどういうものなのか、自分の
好きな音はどんな音なのかを探すようになりました。

奥田 音を探す……。

大萩 ギターという楽器は、弾く場所によって硬い
音が出たり柔らかい音が出たりと、いろいろな種類
の音が出せます。「爪」の角度によってもそれはさまざ
まに変わってきます。そうした音を変化させることが
可能な楽器だということが遊んでいるうちにわかって
きて、自分の好きな音を見つけていったんですね。

奥田 ということは、お母さんにはできなかった音
の聞き分けができたのですね。

大萩 でも、母は「面白い・面白くない」の判断は
できて、「この演奏はつまらんね」とか言っていまし
たから、できないというわけではありません。音の
聞き分けというのは、食の好みなどと同じようなも
のだと思いますね。はっきりとした味が好きな人も
いれば、出汁の微妙な違いがわかる繊細な舌の人
もいるわけですから。

自前のコンサートを開いて 渡航費用を捻出

奥田 その後、大萩さんはプロの道に進まれるわ
けですが、そこに至るまでにどんな経験をされたの
でしょうか。

大萩 8歳のときに地元のギターサークルに入れて
もらったと話しましたが、はじめはアンサンブル（合
奏）のクラスに入れられました。そこでは単音ばか
り弾くわけですが、たとえばAパートとBパートを
合わせて弾いたら面白いのではないかと思って実際
に弾いていると、先生が「それでは合奏にならない
から、大萩君はソロの練習をしましょう」と。私は
単なる好奇心から弾いてみたのですが、それを先
生は見抜いてソロの勉強をさせてくれたわけです。
奥田 サークルの先生は、大萩さんの才能にいち
早く気づいたのですね。

大萩 その先生は萩原博さんといい、学校の先生
もされていますが、とてもオープンな方で「大萩君

美しい曲を奏でる大萩さんの手と 「プラテロとわたし」のアルバム



高名なギタリストの手をじっくり見たのは、これがはじめてだ。「プラテロとわたし」は、大萩さんのセルフレーベル「MARCO CREATORS」の第一弾作品。メゾ・ソプラノ歌手波多野睦美さんの新訳による歌と朗読、そしてジャケットの表装は銅版画家山本容子さんによるものだ。

は自分より優れた先生につくべきだ」と判断し、自
分の車で福岡にいる別の先生のところまで連れて
行ってくれました。

奥田 そうした判断をされた萩原先生は立派だし、
大萩さんにとっての恩人ですね。

大萩 はい、恩人の一人です。この方がおられなか
ったら広い世界に出ることはできなかったと思います。

奥田 いわば、小さな金魚鉢の中から大きな海に
放してくれたのですね。

大萩 そうですね。そして福岡の先生も同様に、
次のステップに向かう時期が来たら、快く送り出
してくれました。

奥田 ご自身の努力や実力もさることながら、人にも
恵まれたのですね。それで、高校卒業後はヨー
ロッパに留学されるわけですが、その決断はどん
な状況でされたのですか。

大萩 高校2年生のとき、沖縄で行われた講習会
に聴講生として参加したのですが、そのときの先生
が先ほどお見せした「DUO²」で演奏されている福
田進一さんでした。講習が終わった後、私と村治
佳織さんが呼ばれ、高校を卒業したらどうするか聞
かれました。同学年の村治さんは「留学します」と
即座に答えました。私はそれを聞いて「留学という
手があるのか」と思い、調子に乗って「僕も留学し
ます」と答えてしまったんです。でも、具体的にど
うすればいいかわからなくて、福田さんに尋ねると
「親を説得するのも才能の一つだ」と言われました。

奥田 うまいこと言いますねえ（笑）。

大萩 そうなんですよ。口がうまいんです（笑）。
それで私は、母親を説得するための想定問答集を
つくったんです。でも、それは不要でした。母は
二つ返事で「行っておいで」と言ってくれたのです。

奥田 拍子抜けだけど、ありがたいですね。

大萩 ただ、母は私の留学費用を用立てるのに苦
劳していました。そこで親頼みだけでなく自分もな
んとかしなければと、私は自前の企画でコンサートを
開くことにしました。近所の美容院やそば屋さんなど
に頼んでコンサートのパンフレットに広告を出しても
らい、そのお金で会場を借り、満員となった入場料
収入で最初の渡航費用を賄うことができたのです。

奥田 それはすごい。高校2年で自立だ。

大萩 そして、ただ留学するというのでは親も安
心できないだろうと思い、いろいろなコンクール
に応募しました。それで上位に入り結果を残せば、
納得してくれると考えたのです。

奥田 調子に乗って留学を決めたにしては、とて
もしっかりとした計画を立て、それをきちんと実行
されたのですね。

（つづく）

BCNは「ものづくりの環」を支え
育むメディア企業です

使う人 売る人
つくる人

——「ものづくりの環」の詩——

ものを使う人がいます
ものを売る人がいます
ものをつくる人がいます

いつの時代も私たちは生活の心地よさを求めます
その意（おもい）が新しいものを生み出す

使う人、売る人、つくる人——
私たちは「ものづくりの環」のなかで
すべての人の心が豊かになることを願っています

株式会社 BCN

<http://www.bcn.co.jp/>

※この記事は、BCN+Rの「千人回峰（対談連載）」で公開中です。
<https://www.bcnretail.com/hitoarite/>